０３・鏡の前で乳首の勃起ぶりとお●んこの濡れ具合を優しく『診察』されながら極楽セックス

本編『０２・会って数時間なのにいっぱい治療キスされてとろとろにされて、オナ禁バレまでする』からそのまま続き。
とある年の春。
五月上旬。十八時すぎ。
場所はミネルヴァの屋敷内、実験室。
天気は晴れ。室温は二十二度程度。
とても心地よい夕方である。

部屋はとても広く、主人公はその中央にいる。
そこは石でできた一見冷たい印象の部屋だが、ミネルヴァの作った魔法装置のおかげで、快適な気温に保たれている。

ＳＥ１　外の環境音
【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】
【部屋の外の音を、部屋の中から聞いている】
【０―５秒ほど流してＳＥ２】
【その後、音量が小さくなる】
【ごく小さな音量で流す】
【トラック終了まで流し続ける】

ミネルヴァ、主人公に息がかかるほど近い『正面０センチ』の距離で話し始める。

●正面　０センチ
「【優しく、静かに。
主人公を苦痛から解放し、肉体的にも精神的にも満足させるために、服を脱ぐよう主人公に促す。
主人公からしてみれば、これはセックスの誘いにしか聞こえない。
ミネルヴァとしても、それで相違ないと思っている。
だが、今のミネルヴァは、いやらしい欲がまったくないとは言えないが、それ以上に主人公を助けたい気持ちが強い。
なので、とても真剣。

優しいが有無を言わせない雰囲気がある】
……服を脱いで。今すぐ触れてあげるから」

〈主人公〉
「えっ……？
あっ……その……っ」

●正面　0センチ
「【優しく続きを促す。
現在のミネルヴァは絶対治療の慈悲モードに入っている。
そのため、己に対して『恥ずかしい』とか『照れる』とか『痛い』とか『躊躇する』といった、治療の邪魔になりそうな感情に対して、極端に鈍くなっているので】
うん？」

〈主人公〉
「えっと……その……。
そんな、事っ……」

主人公、とっさに左手をぱっとミネルヴァの前に出すと、当然のように身体を近づけてくる彼女を、なんとか制止する。
それから、改めて今日起きた出来事を振り返ってみる。

――親友の、約二週間、合計約四十回にも及ぶ反対を振り切って、とある職場の面接を受ける事にした。
無事に採用されたはいいものの、面接後に倒れ、目を覚ますと声が出なくなっていた。
また、これによって、自分がよくわからない奇病に冒されている事を知った。
幸い、面接相手が医師だった事で即座に病は治療され、事なきを得た。
医師は、過去これと同じ病に……故意に？　罹患した事があったのも、迅速な対応の一助になったといえるだろう。
しかしその時、医師は主人公ほどの重症には至らなかったらしい。
医師はそれを精神的ストレスの度合いの違いと捉えており、心身ともに弱り切った主人公の事を、非常に心配してくれているようだ。
その献身ぶりは、ありがたくも、かえって心配になるほどのものだ。
だが、彼女はこれまでもこうして患者を治療してきたのだろう。きっと、そういう人なのだ。
そんな彼女に、主人公は好感を持っている。少々変わった人物だとは思うが、その熱心

な対応に、感謝と尊敬の念を抱き始めている……。

と、ここまではいい。

ここまではまぁ、理解できる話だと思う。

●正面　0センチ

「【※1回※　キスする。

軽く触れるだけの優しいキス】

ちゅ。

【主人公の問いを優しく肯定する】

ええ。いいのよ。私が、したいのだから。

【一呼吸おいてから。

優しく。

そう言った途端、実感がわいてきた感じで。

ミネルヴァは現在絶対治療の慈悲モードに入っているはずだが『あら？　でも、それって……？』といった、理解しきれていない別の感情が早速入り混じる。

この感情が、翌日以降のミネルヴァに大きく影響していく】

そう……私が、したいの。

【※3回※　キスする。
軽く触れるだけの優しいキス】
ちゅっ。ちゅ。ちゅ❤
【※4回※　呼吸する。
少し荒いが、まだ余裕のある呼吸】
はぁ、はぁ、はぁ。
はぁっ……❤」

だが、医師というものは、どれだけ患者の事が心配でも。
また、その患者が禁欲のせいで、どれだけストレスをためていたとしても。
『では、私が欲求処理のお手伝いをしてあげましょう』とは言わないだろう。
主人公はこれまで重病にかかった事もなければ入院した事もないが、この認識は間違っていないと思う。
仮に。仮にもしそんな事をする医師がいるとしたら。
それはとりあえず、一般的な考えを持つ存在ではないし。それに加えてとんでもなく優しすぎるか、性に対する考えがフラットすぎるか。実は自分もとんでもなく性的欲求が高まっているか、あるいはその患者に特別な感情を抱いているか、そのあたりの人物なのではないか。

……じゃあ、ミネルヴァさんは、どれなのかしら。

……そう己に問いかけてみても、最後以外、全部の気がしてくる。

ＳＥ２　ミネルヴァが主人公の服を脱がせていく音

【最初から最後まで流す】

●正面　３０センチ

「【優しくうっとりと。

少し高揚してきたような感じで。

主人公の裸体が、想像していたよりもはるかに美しかったので】

あら……綺麗な身体。とても素敵だわ……」

ミネルヴァ、ここで主人公の額、『正面０センチ』の少し上『正面　上１０センチ』ほどの高さにキスをする。

●正面　０センチ　上　１０センチ

「【※1回※　額にキスする。
軽く触れるだけの優しいキス】
ちゅ」

こうして主人公は考えを巡らせるが、何一つ答えは出ないどころか、ここまでできた事は、先ほどの、手をちょっと前に出す事だけだった。
その手も今は優しくおろされ、ただただ今『綺麗な身体』と言われた事にどきどきして、息もできずにいるばかりだ。
そうするうち、主人公の服は丁寧に脱がされ、いつのまにか下着姿にされている。
これでも、頭はどうにかして『普段の自分であろう』『この状況に『おかしいでしょう』と叫ぼう』とはしている。
だが身体が、これらの実行を拒否していた。
……だって、すべてはミネルヴァの言う通りなのだ。
主人公は本当は……ただ気持ちよくなって、すべてを忘れたいのだ。
それをしてくれるのが、自分を理解してくれたミネルヴァなら、なおさらだ。
ミネルヴァ、『右0センチ』の距離まで近づいて『無声音ささやき』をする。

●右　0センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく

「【優しく、静かに、そっとささやく。
やはり、優しいが、有無を言わせない雰囲気がある】
下着もとりましょうね。今は不要だから……」※

SE3　ミネルヴァが主人公の下着を脱がせていく音
【最初から最後まで流す】

だから、次の行動はもう、無意識だった。
ミネルヴァが下着の紐に手を伸ばし、ほどこうとする。
だから主人公はそっと自分から背中を傾け、脱がせてもらいやすい格好になった。
それが終われば、これまでこの身に密着していた布が去っていって。弱いところが空気に触れる時特有の、妙な居心地の悪さと解放感がやってくる。
だが、それに浸る間もなく、今度はそれとなく足を開くよう促された。
だからまた従って……今度はあの、ぐちゃぐちゃに濡れた下まで脱がせてもらう。
こうして主人公は裸になった。
自分の意志を持とうと努力するふりをしながら、実際はまた流されて……いや、それすらいまや適切な表現ではない気がする。

主人公は今、自分がはっきりどうしたいのかは言わないまま。積極的にミネルヴァの厚意を受け入れていたのだ。

ミネルヴァ、『右０センチ』から『正面０センチ』の距離に移動すると、キスをする。

●正面　０センチ

「【※１１回※　キスする。
軽く触れるキスから、だんだんねっとりと、濃厚なキスになっていく。
だが、ミネルヴァが意図したものではない。
お互いにとって気持ちのいいキスをしようとした結果、どんどんのめり込んでいくキス】
ちゅっ❤
んんぅ……ちゅっ❤
ちゅっ❤　ちゅっ❤　ちゅっ❤
あぁんむ……ちゅ❤
ちゅ❤　ちゅ❤　ちゅ❤
【※息遣いのみ※　で表現する。
優しくうっとりと。
少し高揚してきたような感じで。

主人公とのキスが、あまりにも気持ちよかったので】
はぁ……❤
【優しく、とても嬉しそうに。
主人公が自然にキスに応じただけでなく、自分とのキスで喜んでくれている事が、ありありと伝わってきたので】
可愛い。キスがしたかったのね。
そんなに喜んでくれるなんて……❤
【優しく、主人公の期待に応じるように】
いいわ……もっとしましょう。
【さらっと、素直に言う。
ミネルヴァとしてはそれなりに主人公への好意をもって言っているつもりだが、通常と何も変わらない雰囲気に聞こえる。
また、ミネルヴァは自分の感情について、頓着がなさ過ぎる。
具体的には、純粋な厚意、慈悲と恋愛感情の違いがわからない。
それらを判別しようとした事もないので、主人公への気持ちがなんなのか、まるで理解していないまま発言している】
私も……したいから。
【※９回※　キスする。

先程よりもゆっくり、ねっとりと、濃厚なキス。
ミネルヴァはまたも無意識のうちにのめり込んで、夢中でキスをする】
あぁんむ……ちゅ❤
ちゅ❤　ちゅ❤
えれれ……ちゅるっ❤　ちゅるっ❤
ちゅるっ❤
ちゅぱぁっ……❤
【※６回※　呼吸する。
苦しそうだが、どこか嬉しそうで高揚した感じで。
ミネルヴァの中で、主人公と触れ合う事が、どんどん幸せな事になっていっているので】
はぁ、はぁ、はぁ。
はぁ、はぁ、はぁっ……❤」

ミネルヴァ、ここで額、『正面０センチ』の少し上『正面　上１０センチ』ほどの高さにキスをする。

●正面　０センチ　上　１０センチ
「【※額に※　キスする。

軽く触れるだけだが、明確に好意をもってするキス】
ちゅ❤」

ミネルヴァが、また不意打ちのように額へキスをする。
それはどう捉えても医療行為ではなさそうだから、唇へのキスよりもドキドキする。
主人公はそれを受けてびくりと跳ねると、息もできないほどの甘い刺激に満たされた。

ミネルヴァ、ここで『正面１５センチ』に戻って話し始める。

●正面　１５センチ
「【小さく笑って。
本人としては照れ笑いしているつもりだが、ただ少し笑っているようにしか聞こえない。
先ほどの額へのキスは、ミネルヴァにとって、主人公への明確な好意をもってしたキスだったので。
それに、我ながら少し照れたり、自分で自分が微笑ましくなってしまったりしている。
このような事をしたのは生まれて初めてなので。
だが、主人公にはまるで伝わっていない】
……ふふ。

【※特に聞き手をドキッとさせるイメージで※
嬉しそうに。
実感を込めて。
ミネルヴァは純粋に、主人公の人柄や容姿を好ましく、可愛らしいと思っているので。
また、主人公が自分の治療にいちいちぴくんと反応している事も、とてもかわいらしく感じているので】
貴方って……とても可愛いわ。
【※息遣いのみ※　で表現する。
うっとりとため息をつく。なんだかとても幸せな気分なので】
はぁ……❤
【かすかに気持ちよさそうに。
穏やかにとても優しく。
ふと思い出したように。
主人公の乳首について述べる。
まるで他意なく、ただ見たまま、感じたまま、そしてそこから考えられる事を素直に述べる】
……そうだ。
お乳の先っぽ。

すごく硬くなっているのね。
先程から私の身体に何度も当たって。
その度に、少し擦れるだけで、とても気持ち良くなってしまっていたものね」

〈主人公〉
「……！」

だが、うっとりと流されていた主人公の心は、ここで唐突に引き戻される。
あまりにも恥ずかしい指摘に、いよいよ逃げ出したくなったからだ。
ミネルヴァに他意がない事は、もう、嫌になるほど重々承知している。
ミネルヴァはとにかく感じたまま、考えたままを素直に言いすぎる傾向があるのだ。
しかしその指摘は、少なくとも主人公に対しては、いつでも正しい。
裸にされた主人公の乳首は、今、緊張と期待で、みっともなくも勃起していた。
それは布に当たるようなかすかな刺激でも敏感に反応し、逐一、思わず息が漏れるほどの快感をもたらす。
だから本当は、もっとしっかり触ってほしい。
擦れるだけでは、あまりにも切ない。
自分から脱がしたのだから、もう放っておかないでほしい。

そう思いながら耐えていた事が、もう見抜かれてしまった。

ミネルヴァ、ここで額、『正面０センチ』の少し上『正面　上１０センチ』ほどの高さにキスをする。

●正面　０センチ　上　１０センチ

「【※額に※　キスする。
軽く触れるだけだが、明確に好意をもってするキス】
ちゅ」

そこでまた、髪と額へのキスだ。

主人公はもう観念したように目を閉じて、包むように伸びてきたミネルヴァの両手に、素直に抱きしめられる。

そうするとまた、あの花のようなにおいがする。

それがなんの花の香りなのはわからなかったが……主人公は、彼女にぴったりだと思った。

ＳＥ４　ミネルヴァが主人公を抱きしめる音

【最初から最後まで流す】

ミネルヴァ、『右０センチ』の距離まで近づいて『無声音ささやき』をする。

●右　０センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく

「【優しく、静かに、そっとささやく。
ミネルヴァとしては完全な善意で言っている。
だが実際には、主人公をたまらなく恥ずかしくさせている】
ちゃんとわかっているから、安心してね」※

〈主人公〉
「っ……❤
はい……」

主人公、とろけた目をようやく開けると、ただ一言そう言って。その時、とうとう涙がこぼれた。

……ミネルヴァさんはもう、わたしの身体がどうなっているか知っているだけでなく、

今、わたしがどう感じているかまで把握している。
だったらもう、なすすべなんてないわ。
わたしがそれに抵抗したいとか、ミネルヴァさんの事が嫌だと思っているのならまだしも……。
わたしは気持ちよくなりたい。
この人にそうされたい。
そう思っているんだから……もう、だめだわ。

そんな事を思いながら、潤んだ瞳でミネルヴァを見上げ、目を閉じて。
受動的ながら、キスを求めた。
それが自分自身に対しても、ミネルヴァに対しても、降参の合図だと思った。
ミネルヴァはそれを神秘的な色合いの瞳で、正面から見つめ返してくれると……優しく応えてくれる。

ミネルヴァ、『正面０センチ』の距離まで近づいて、キスをする。

●正面　０センチ
「【※１回※　キスする。

軽く触れるだけの優しいキス】
ちゅ」

ミネルヴァ、『正面０センチ』から『正面３０センチ』の距離まで離れて話し始める。

●正面　３０センチ
「【うっとりと。感嘆の『あぁ』。
主人公が受動的ながらキスを求めてくれた事が嬉しいので。
また、これによって、主人公が自分を受け入れ始めている事が理解できたので】
あぁ……。
【優しく、とても心配そうに。
なので、引き続き主人公の乳首について述べる。
ミネルヴァとしても、この発言が『主人公の身体に対して、いやらしい指摘をしている』
という事くらいはわかっている。
だがそれ以上に、ここまで我慢していた主人公の事が気がかり。
そのためまだ、性欲よりも心配の気持ちの方が強いので】
色も、腫れているみたいに赤くなってる。
切ないでしょう。

貴方のお乳は、こんなに待ちくたびれていたのね。
【ひときわ心配そうに。
『なんらかの方法で刺激して、求めている快楽を与えてあげなくちゃ』と意味で言っている】
いけないわ……。
楽にしてあげなくちゃね」

〈主人公〉
「ぁっ……？」

だからこの声は、もう戸惑いではなくて、期待によるものだった。
主人公はこれからミネルヴァに何をされるのか、すでに理解していた。
理解した上で抵抗も逃げもせず、ただ受け入れていたのだ。

ミネルヴァ、話しながら『正面３０センチ』から『正面　下３０センチ』まで移動する。

●正面　３０～　正面　下３０センチ
「【※話しながら移動する※

近づく前に口を開けて、そのまま近づく】
はぁんむ……❤」

〈主人公〉
「あっ……❤」

『それ』を口に含まれた瞬間、途端に力が抜けていく。
主人公は漏れるように息を吐くと、無意識のうちにベッドに後ろ手をついた。
それから……ミネルヴァの唇と舌を、自分のとても弱い部分で、ただ感じとるのみとなる。

●正面　下　３０センチ
「【※しばらく、乳首を吸う※
最初は軽く、音も小さく。
だんだんねっとりと、思いつく限りの様々な技巧を凝らして舐めるようになり、それとともに音も大きくなっていく。
ミネルヴァは、吸ったり、舐めたりしていくうちに『この程度の刺激では足りないみたい。つまり……もっと強くしてもいいみたい。……まだ、これでも足りない？』と気づい

ていくので。
『合っている』事により、ミネルヴァは主人公の快感の度合いがわかるので。
つまり、主人公が実際どのくらい感じているのかを、身をもって把握しながら、攻める事ができる状態】
ちゅ❤
れぇろぉっ……ちゅ❤
れろれろ……れろれろ……れろれろ。
ちゅっ❤
ちゅぱぁっ……ちゅ❤
れろれろ……れろれろ……れろれろっ❤
えれえれえれえれ……。
ちゅるるる……ちゅっ❤
ちゅっ❤　ちゅっ❤　ちゅっ❤
ちゅぷっ❤
れろれろ、れろれろ、れろれろ……❤
れろれろ、れろれろ。
ちゅぱぁっ❤
ちゅぱぱっ❤　……れー……っ❤

……ちゅぱあっ❤
【※息遣いのみ※　で表現する。
ゆっくりと、一息つく。
以後動くまで『正面　下３０センチ』の距離のまま。
主人公の顔を見上げながら話している】
ふー……。
【優しくにこやかに、うっとりと。
主人公の反応や、彼女が受けている快感について、かわいらしいと感じているので。
だがその一方で、『この程度の刺激では足りないらしい』という事もすでに理解している。
『いやらしい事を言って主人公を動揺させたい』のではなく『このままでは刺激が足りない事はわかっているわ。だから、今後、このような形で刺激してあげますからね』と説明しているつもりで言っている】
可愛い反応……。
お乳を吸われたのは初めてなの？
これから、沢山。
いくらでも舐めて、吸って。
こねて、ぐりぐりして……嬉しくさせてあげますからね」

〈主人公〉
「あっ……❤」

その時、本当にもうダメだと思った。

……してほしい。その言葉の通りに、もっとしてほしい。

主人公は心からそう思い、ミネルヴァの言葉に何度も頷いたからだ。
これまで主人公は自分の事を、もっと意志が強くて、我慢も強くて、潔癖な女性だと思っていた。
だが、そうではなかったらしい。
実際の主人公はただただ弱く、張り始めた意地を通す事もできない。
ちょっと優しくされただけで心は大きく揺らいで、好意を抱いて。自分の気持ちをわかってもらえただけで、こんなに嬉しい。
主人公は今、出会ってまだ数時間のこの魔女との行為に、喜びだけでなく、救いまで感じている。
己の弱さを、こうも甘やかしてくれる彼女に、この身を預けたくなっている。
そんな自分は、愚かで弱いと思う。

それでも……今だけは許してほしかった。

ミネルヴァ、『正面０センチ』の距離まで近づいて『無声音ささやき』をする。

●正面　０センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく

「【優しく、静かにそっとささやく。

丁寧な口調だが、すべて確信をもって言う。

なので、問いかけのようなセリフでも、語尾は上がらない。

やはりミネルヴァ本人に『いやらしい質問をしている』という自覚はありつつも、まだ『主人公を欲求不満状態から解放したい』という気持ちの方が強い。

なので、本人には煽っているつもりは一切ない。

『乳首を唇と舌だけで刺激するのでは足りないようだ』と気づいているので。

またミネルヴァは、まだ『歯を使って刺激する』という発想がないので。

その結果『現状では、手指で刺激するのがもっともよさそうだ。これは『合っている』事による推測だが、主人公はその刺激に慣れているようだし』という結論に至る】

心配しないで。

貴方の好きな事、して欲しい事はちゃんとわかってる。

お乳ちゅうちゅうの刺激では、今は優しすぎて物足りないのでしょう。

わかるわ。貴方は今お胸を、下からしっかり持ち上げて。
先っぽしこしこで気持ちよくなりたいのよね。
それが大好きで、一人の時も、きっといつもそうしているのでしょう？
……今すぐしてあげる。
安心して頂戴。もう大丈夫ですからね」※

主人公、ミネルヴァの優しい言葉に、泣き濡れた目でこくりと頷く。
今まで知り得もしなかった事だが、一方的にしてもらうセックスは気持ちよすぎる。
自分のすべてを受け入れてもらっているような、そんな錯覚に陥る。
それを『錯覚は錯覚だ』と切り捨て、己の目を覚まさせるような。そんな強い自分は、もう主人公の心にはいなかった。

ミネルヴァ、『正面０センチ』から『右０センチ』の距離に移動して話す。

●右　０センチ
「【※息遣いのみ※　で表現する。
少し考え込むような吐息】
……。

【優しく、だが有無を言わせない雰囲気で提案する】
そうね……少し座り方を変えましょう」

ここでミネルヴァがそう言って主人公の右耳元から離れると、小さく指を鳴らす。

SE5　ミネルヴァが自分の指を鳴らす音
【最初から最後まで流す】

SE6　ふわっと、主人公とミネルヴァの位置関係が変えられる音
【最初から最後まで流す】

すると次の瞬間、主人公の身体はふわりと浮き上がる。
気づいた時にはミネルヴァに後ろから抱きかかえられる格好で着地しており、その鮮やかさに息をのむしかない。
さながら魔法のようだが、実際に魔法を使ったのだろう。
背中と胸が密着した事で、主人公は先ほどまでよりも強くミネルヴァの存在を意識する。
そんな彼女の左耳に、ミネルヴァは壊れ物に触れるようにそっと話しかけた。
ミネルヴァは柔らかくて、しっとりと湿っていて……思ったよりも熱い。

ミネルヴァ、『右０センチ』から『左０センチ』の距離に移動して話す。

●左　０センチ

「【とても優しく。

何事もなかったように続ける。

ミネルヴァは今、魔法を使って主人公と自分の位置を変更した。

しかし『どうにかして主人公を気持ちよくしよう』という事に夢中で、急に魔法を使って位置関係を変えたり、それについて主人公がどう感じていたりするかという事に、意識が行っていないので】

こうやって、貴方を私の膝の間に入れて。後ろからしてあげるわね。

【奥の壁のところを指さして話しているイメージで】

そうだ……少し離れたあそこ。そこへ、鏡を置きましょう」

ＳＥ７　ミネルヴァが魔法を使う音

【最初から最後まで流す】

そして唱えられたさらなる魔法によって、主人公の受け取る情報量は一気に増す。

ミネルヴァは言葉の通り、ベッドから少し離れた位置に、魔法で大きな鏡を置く。
するとそこには当然ながら、今の二人が映し出される。
裸の自分をこんな形で見るのは、当然ながら初めてだ。
主人公は思わず目をそらそうとするが、ミネルヴァの無邪気な優しさは、それを許さない。

●左　0センチ
「【とても優しく。
何事もなかったように続ける。
『どうにかして主人公を気持ちよくしよう』という事に夢中で、急に魔法を使って位置関係を変えたり、それについて主人公がどう感じていたりするかという事に、意識が行っていないので】
これで私からも、貴方からも。
貴方のお顔と身体が、よく見えるわ。
【優しく穏やかに。
本当に言葉の通りの気持ちで言っている。
いやらしく煽っているようにしか聞こえない言葉だが、まったくそのつもりがない】
貴方も、自分が今どのような姿になっているかわかった方が、安心でしょう？」

ミネルヴァ、『左０センチ』の距離のまま『無声音ささやき』をする。

〈主人公〉
「あ、のっ……❤」

主人公、あまりにも恥ずかしすぎる提案を受けて、とっさに振り向く。
それから『気持ちはありがたいが、状況は十分にわかるから、やめてほしい』と頼もうとした。
だがそれをミネルヴァは『この状況を説明しろ』と言っていると受け取ったようだ。
親切にも、主人公が今何をされているのか、丁寧に伝えてくれる。

●左　０センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【優しく、静かにそっとささやく。
主人公に『この状況を説明してくれ』と言われているのだと解釈して、見たままを丁寧に説明する。
『あそこ』とは鏡の事】
ええ、そうよ。

あそこに映っている通り。
今の貴方は、裸になって、ベッドに座ったまま。
私に後ろから抱きしめられている。
これから……」※

SE8　ミネルヴァが手を動かし、主人公の胸と乳首に触れる音
【最初から最後まで流す】

〈主人公〉
「あ……❤」

その言葉と共に、主人公の裸の胸はミネルヴァの両手に持ち上げられる。
その手が先端へと延びて、赤く硬くなった部分を刺激し始めるまで、数秒もかからなかった。

●左　0センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【優しく、静かにそっとささやく。
主人公に『この状況を説明してくれ』と言われているのだと解釈して、見たまま、して

いるままを丁寧に説明する。
【主人公の胸を愛撫しながら話している】
こうやって。こんな風にお乳いじりをされるの。
親指と人差し指で挟んで」

〈主人公〉
「……あ❤　ぁ……❤　ぁっ❤」

長い事自分自身すら触れていなかった弱い部分が、いともたやすく捕らえられ、好きにされていく。
初めて触るくせに、どう触ればいいか全て知っている指先によって、蕩かされていく。

●左　0センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【優しく、静かにそっとささやく。
主人公に『この状況を説明してくれ』と言われているのだと解釈して、見たまま、しているままを丁寧に説明する。
主人公の乳首を愛撫しながら話している】
こんな風に、ぐにぐに、ぐにぐにと摘まれて。

可愛い声をあげている所が……あの鏡に映っている」※

ミネルヴァ、『左０センチ』の距離のまま話す。

●左　０センチ

「【うっとりと。

心から実感を込めて。

ここから、ミネルヴァに心境の変化が訪れ始める。

一つ前までは完全なる厚意や素直な気持ちで行動していたのに、裸の主人公と身体を密着させ、本格的に愛撫を始めた事により、無意識のうちに主人公への欲求が高まってきたので】

はぁ……可愛いのね。

……なんて可愛いの……。

【※３回※　耳舐めする。

ただ無意識に『ただそうしたかったから』という感じで】

ちゅ。ちゅ。れぇろぉっ……❤」

〈主人公〉

「あぁっ……❤」

こうして主人公は、いよいよミネルヴァにされるがままとなった。
主人公の身体は、もはやミネルヴァの手の、指先の。それらの力のかかり方に身体の全てを翻弄され、びくびくと従順にさえずり、反応して。彼女を楽しませるのみとなってしまったのだ。
でも、それが嬉しくて、気持ちいい。
このままこちらの意思など無視して、いや最大限に汲んで。どろっどろになるまで犯してほしい。
そんな事を本気で思う。

ミネルヴァ、『左０センチ』の距離のまま『無声音ささやき』をする。

●左　０センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【優しく、だが少しずつ興奮が高まっている感じで。
主人公の乳首を刺激しながら話す。
主人公の、自分の刺激によってたやすく形や硬さを変える乳首や、甘い喘ぎ声を漏らすかわいらしい様に、欲求をあおられているので。

これまで通り見たままを素直に話しているつもりが、次第に無意識のうち『あぁ、これをすると、より彼女の快感や羞恥心が高まるみたい』と自覚的になり、だんだん、あえて、故意に言うようになっていく】

貴方のお乳首。とても硬いのに、こりこり柔らかくて。

……とてもいやらしいわ。

ずっと待っていたせいね。

単調な刺激じゃ、満足できないんだわ。

【少し間をあけてから。

優しく、少し考えてから話す感じで。

ミネルヴァは、これまで通り真剣である。

だが、そこには『主人公がもっと気持ちよくなるにはどうしたらいいか』という気持ちと、『どうしたらもっと、この可愛らしい喘ぎ声が聞けるか』という気持ちが入り混じる】

そうね……。

今度は優しく、親指の腹でくるくるしてみましょう。

【ゆっくりめに。

乳首を、親指を使って軽く回転させながら話している】

くるくる。くるくる。くるくる……」

〈主人公〉
「あ……！　あ❤　あ❤」

ミネルヴァ、『左０センチ』の距離のまま『無声音ささやき』をする。

●左　０センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【ふと気づいたように。
この愛撫は、先ほどよりもさらに反応がいいので】
あら……根本（ねもと）から倒されて、くりくりされるのが好き……？
【うっとりと。
少し戸惑いつつも興奮している感じで。
初めて他人の性欲を正面から受け止める事になり、その強さや欲望の深さに少し驚きつつも、もっと主人公のために色々してあげたいと思い始めている。
また、主人公の反応があまりにもかわいらしく、嗜虐心をそそるので。
それに応えるように、自分の優しくもサディスティックな一面があらわれてくる】
欲張りな乳首さんね。
わかったわ。そんな悪い子は、強く引っ張って、躾けてあげなくちゃね。
【乳首を優しく引っ張り、伸ばしながら話している。

先程の言葉とは裏腹に、さほど強く引っ張ってはいない。
主人公に痛い思いをさせる事は、ミネルヴァにとってとても恐ろしく、避けたい事なので】
ぐーっ……。ぐーっ……。くーっ……❤
【優しい声のままだが、少しだけ意地悪にささやく。
初めて明確な意思をもって、主人公に意地悪を言う。
自分の手で好きにされ、乳首をいたずらされている主人公の姿が、あまりにも扇情的なので。
また、『合っている』ミネルヴァとしても、この刺激はものすごく気持ちがいい。
なので、主人公がとても感じている事を確信した上で、自分も少し余裕がなくなっている】
ほら……こんなに伸びてる。
見えるでしょう……？
気持ちいい事が大好きな貴方の乳首さんが、沢山こりこりになって、こんなに伸びて。
私の手に、意地悪されている姿が」※

〈主人公〉
「あっ❤　……やーぁっ……❤　あっ❤　あー……っ❤」

主人公の喉から、これまで聞いた事もないような、媚びた甘い声が漏れる。
先程まではまともに機能もしなかったはずなのに。
今は、これを聞くただ一人に、もっと気持ちよくしてほしくて。もっと自分をわかってほしくて、延々と鳴き続けている。
もしこれを、つい数時間前までの自分が聞いたら。きっと彼女は真っ赤になって『こんな自分は自分じゃない』と主張するだろう。
だが、もうそんな事はどうでもよかった。
主人公はもう、ミネルヴァの事と、彼女に可愛がられる事しか考えていなかったからだ。

ミネルヴァ、『左０センチ』の距離のまま『無声音ささやき』をする。

●左　０センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【優しい声のままだが、少しだけ意地悪にささやく。
明確な意思をもって、主人公に意地悪を言う。
自分の手で好きにされ、乳首をいたずらされている主人公の姿が、あまりにも扇情的なので。
これを、是非とも主人公自身にも見て欲しいので。

また、『合っている』ミネルヴァとしても、この刺激はものすごく気持ちがいい。
なので、主人公がとても感じている事を確信した上で、自分も少し余裕がなくなっている】
ダメよ。目を閉じないでね……とても可愛いのだから。
ちゃんと前を見て。
貴方も。
お乳首いじりでとろけて、すごく可愛くなっている貴方をちゃんと見て。
【※ひときわセクシーに、聞き手をドキッとさせるイメージで※
少しかすれ気味の優しく、でも少し意地悪な声で。
このセリフで『もうこれまでの、善意で思ったままを話しているミネルヴァとは違う。
明確に主人公を性的な目で見ていて、主人公の興奮を煽り、感じさせようとして話している』という事が伝わるように】
だって……こういうのが興奮するのでしょう……？
わかってるわ。沢山そうしてあげますからね。
私……貴方に気持ちよくなってほしいもの。
【※1回※　耳にキスする。
いたわるような優しいキス】
ちゅ❤」※

耳元でささやかれる、都合がよすぎるほどに優しい声、吐息。
主人公の心身の機微を繊細に読み取り、丹念に動く指先。
そして、全身を支えてくれる彼女の身体。
それらに、主人公のすべては溶かされていく。
無理に張る意地も、何かに耐える義務も。本心を違う事をして我慢する癖も、もう全部、どこかへ流れて消えてしまった。

〈主人公〉
「っ……❤」

だから主人公は、とうとう自分から動いた。
顔をミネルヴァの方に向けて、また目を閉じて、今度は自分からキスをした。

SE9　主人公がベッドの上で動く音
【最初から最後まで流す】

ミネルヴァ、『左0センチ』から『正面0センチ』の距離に、主人公によって移動させら

れる形で、キスをする。

●左　０センチ～正面　０センチ

「【※動きながら※　話す。

少し驚いているようで、嬉しそうに。

主人公から明確にキスをねだられたので。

顔の角度を、キスしやすいように動かすイメージ】

あら……。

【※１回※　キスする。

軽く触れるだけの、だが甘々なキス】

ちゅっ❤

【うっとりと嬉しそうに。

ミネルヴァは、主人公から何かをされる事はあまり想定していなかった。

だが、いざ主人公からキスをされるととても嬉しく、満たされる事がわかったので】

……本当にキスが好きなのね。可愛い。

沢山しましょう……❤

【※１３回※　キスする。

軽く触れるキスから、だんだんねっとりと、濃厚なキスになっていく。

お互いがお互いにとって気持ちのいいキスをしようとした結果、どんどんのめり込んでいくキス】

んっく……ちゅっ❤
ちゅっ❤　ちゅっ❤　ちゅぱぁっ❤
んっ。んっ。んんぅ……ちゅっ❤
ちゅくくく……ちゅ❤　ちゅ❤　ちゅっ❤

【とても優しく、いたわるように。
ミネルヴァは今のキスを『主人公が己を解放で着ている証拠』だと捉えている。
なので、それをもっと促したい】

沢山我慢してきたものね。
だから、今は自分を解放して。
一杯恥ずかしい姿になって。
可愛い喘ぎ声を沢山聴かせてほしいの。ね？

【※3回※　キスする。
軽く触れるだけの、だが甘々なキス】

ちゅ。ちゅ。ちゅっ❤」

〈主人公〉

「んーっ❤　んうっ❤　んう……っ❤」

ミネルヴァ、『正面０センチ』から『左０センチ』に戻って話す。

●左　０センチ

「【やや興奮気味に、うっとりと。
主人公の反応が、あまりにもかわいらしいので】
あぁ……。貴方の声、可愛い……❤
聞いているだけで、脳が痺れるようだわ。
【優しく、少し嬉しそうに。
自分の気持ちに応えてくれる主人公に、もっと喜ぶ事がしたいので。
乳首を刺激しながら話している】
ほら、ぐにぐにしましょう。
【ゆっくりめに、３回とも同じトーンとペースで】
ぐにぐに、ぐにぐに、ぐにぐに❤
お耳も気持ちよくなりましょうね。
【※しばらく※　耳舐めする。
優しいがねっとりと、思いつくままに、衝動的に舐める】

ぺろぉっ……❤
くぽぽぽっ……❤
れろ、れろ、れろ。
くぽぽぽ……ちゅぷっ❤
【優しく、少し嬉しそうに。
自分の気持ちに応えてくれる主人公に、もっと喜ぶ事がしたいので。
乳首を刺激しながら話している】
あぁ……おっぱい気持ちいいのね。可愛い……❤
ぐにぐに摘（つま）むと、可愛い息が漏れているものね。
ふふ……」

〈主人公〉
「あぁ……っ❤」

●左　0センチ
「【ふと気づいて、優しくあやすように。
主人公の言葉にならない欲求を『合っている』事を利用して、丁寧に読み解く】
あら、かゆいの？　てっぺんをかりかりしてほしい？

【※ここからセリフ終わりまで、少々苦しそうに、快感をこらえるように話す※
再び、自分もこらえるのが難しいほど、とても気持ちよくなってきたので。
乳首を爪先で優しく引っかきながら話す】
……っ、いいわよ。
乳首さんを摘（つま）んだまま、先を爪で、優しくかりかりしてあげましょう。
こうよね？
【ゆっくりめに、3回とも同じトーンとペースで】
かりかり。かりかり、かりかり……。
もっとしたい？
【先ほどより少しだけ早く、4回とも同じトーンとペースで】
かりかり。かりかり。
かりかり。かりかり❤」

刺激される度に研ぎ澄まされて、ますます感じやすくなる部分を。
短く清潔な、絶妙な硬さの爪で丁寧に、でも容赦なく引っかかれる。
それはひたすらに気持ちよくて、もどかしさが埋められていく。
呼吸が漏れ、ますます力が抜けていく。
主人公はぐったりと背中をミネルヴァに預けると、ただ快感を享受し、また涙を流した。

気持ちいい。ずっとこうしてほしい。……でも。

そう思う主人公をミネルヴァは見逃さず、さらなる提案をしてくる。

ミネルヴァ、『左０センチ』の距離のまま『無声音ささやき』をする。

●左　０センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく

「【※ここからセリフ終わりまで、少々苦しそうに、快感をこらえるように話す※

優しく、うっとりと。

自分としてもとても気持ちがいいが、ここでのまれてしまってはいけない。

今こそもっと主人公を気持ちよくしてあげなければという使命感が強くなっているので】

あぁ……気持ちいいのね。身体、仰け反らせてしまってる。

乳首さんも、ますます硬くなってきた……。

しっかりしこしこしてあげるわね。

【※息遣いのみ※　で表現する。

自分もとても感じているのをこらえているので】

……ふう。

【少し興奮気味に。
ミネルヴァとしては『とても興奮している』状態なのだが、多少違う程度にしか聞こえない。
うっとりと目をきらきらさせて、とても感じているらしい主人公の乳首をしっかりと刺激しながら話す。
主人公の乳首を、しっかり刺激しながら話す】
すごくこりっとしてる……❤
【ゆっくりめに、6回とも同じペースで。
最後の方は少し甘ったるくなる】
しこ、しこ、しこ。
しこ、しこ、しこ……❤
【※息遣いのみ※　で表現する。
自分もとても感じているのをこらえているので】
はぁあっ……❤
【少し興奮気味に。
途中で喘ぎが漏れる。
ミネルヴァとしては『とても興奮している』状態なのだが『多少興奮している』程度にしか聞こえない。

うっとりと目をきらきらさせて、とても感じているらしい主人公の乳首をしっかりと刺激しながら話す。
主人公の乳首を、しっかり刺激しながら話す】
あぁ……可愛い声。
お乳で、んっ。
一杯気持ちよくなりましょうね……❤
【ゆっくりめに、12回とも同じペースで。
最後の方は少し甘ったるくなる】
しこ、しこ、しこ。
しこ、しこ、しこ。
しこ。しこ、しこ❤
ぐに、ぐに、ぐに❤
【※3回※　耳にキスする。
自分もとても感じているのをこらえているので】
ちゅ❤　ちゅ❤　ちゅ❤
【うっとりと優しく。
心から主人公を褒めている気持ちと、いやらしい言葉で主人公をあおりたい気持ち、半々で言う。

主人公が感じてくれる事は、主人公の回復につながるので】
おっぱいで気持ちよくなれて、偉いわね。
これからは毎日、お乳いじりしてあげますからね。
【※6回※　呼吸する。
少し早めの、興奮気味の呼吸】
はぁ、はぁ。はぁ。
はぁ、はぁ、はぁっ。
【※1回※　呼吸する。
とてもゆっくりとして、興奮気味の呼吸】
ふぅぅーっ……❤」※

〈主人公〉
「……ミ。ネルヴァ、さ……っ❤」

ミネルヴァが散々乳首をもてあそんで、ひときわ甘ったるい息を吐く頃、主人公はもう、ぐずぐずにとろけ切っていた。
ずっと欲しかった刺激を、欲しかった分以上に与えられ。胸は、じんわりとした熱い快感に浮かされている。

だけど身体の芯は、もっと、まだ足りないと欲しがっている。
そんな事はもう、ミネルヴァもわかっているのだろう。
主人公という女性がいかに貪欲で淫乱か、その身をもって理解しているようだった。

ミネルヴァ、『左０センチ』の距離のまま話す。

●左　０センチ
「【※ここからセリフ終わりまで、少々苦しそうに、快感をこらえるように話す※
ゆっくりと優しく。
『もっと気持ちよくしてほしい』と言外に訴えてくる主人公に応えたいので。
なのでまずは、具体的にどうするかを述べる】
ええ……勿論わかっているわ。
もう我慢できないものね。
そろそろこちらの手は、乳首さんを触るのをお休みして……。
代わりに、クリトリスさんをさすってあげる」

〈主人公〉
「ぁ❤」

その時主人公は自分の、こんな露骨に期待して、甘え切って、ただ欲しがるだけの声を初めて聞いた。
それだけではない。もう、自分から身体を動かして、ミネルヴァが自分の好きな所をいち早く見つけられるよう、健気にも手伝っている。
それは情けないほどあさましくて、気持ちよくなる事しか考えてない、ただの女だ。
だけどそれこそが自分だと、あの鏡も言っている。
主人公自身、そう思っている。

ミネルヴァ、右手を主人公の乳首から離して、主人公に足を開くように促す。
ミネルヴァ、『左０センチ』の距離のまま『無声音ささやき』をする。

●左　０センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【※ここからセリフ終わりまで、少々苦しそうに、快感をこらえるように話す※
優しく諭すように。
足を開くように促す】
まずはクリトリスさんで達しましょう……。
もう触って欲しくて、痛い位に熱くなってるものね。

ね？　それがいいわ。
もう少し足を開いて」※

ＳＥ１０　主人公が足を開かされる音
【最初から最後まで流す】
【次の『ミネルヴァ』のセリフと同時に流す】

ＳＥ１１　主人公の股間の水音
【最初から最後まで流す】
【次の『ミネルヴァ』のセリフと重ねて流す】

●左　０センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【※ここからセリフ終わりまで、少々苦しそうに、快感をこらえるように話す※
※２回※　呼吸する。
少し早めの、興奮気味の呼吸】
はぁ、ふぅっ……。
【優しく、少し興奮気味に。
直接指で触れながら、同時に鏡を使って目でも主人公の股間を見ている。

『合っている』事から、主人公の濡れ具合はおおむね察していた。
だが、目で見るとますます刺激的で、予想以上の濡れ方をしていたので】
……あら……すごい。
とろとろだわ。
【※特にひそひそと、セクシーに※
思わず現状を言葉にする事で、主人公を煽りたくなっているので。
『こうすれば、彼女は確実に喜ぶ』と思い始めているので】
貴方の愛液、すっかりシーツに染みてしまっている。
こんなに濡らして、可愛いわね。
気持ちいい事が、本当に大好きなのね。
【優しく、でも有無を言わせない感じで。
もう明確に『クリトリスへの刺激で、まずは一回、主人公をイかせよう』と決めているので】
でも足は、もう少し開きましょうね。
触りやすくしてくれた方が、貴方も気持ちよくなれるもの」※

〈主人公〉
「あぁっ……❤」

ミネルヴァがまたあの口調で、両膝裏を持つようにして主人公の足を広げる。
だけど主人公はもう、恥ずかしくて足を閉じ気味にしていたのではない。
既に問題ないほど開いていたはずなのに……ミネルヴァがもっとよく中が見えるように
と、足を持ち上げてきたのだ。

ＳＥ１２　主人公が足を開かされる音２
【最初から最後まで流す】

●左　０センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【※ここからセリフ終わりまで、少々苦しそうに、快感をこらえるように話す※
※特にひそひそと、セクシーに※
煽りたい気持ちは少しなりを潜め、自然とこの口調になっていく。
なぜなら、静かに話した方が、主人公の性器の音がよく聞こえるので】
……そう……そうよ。いい子ね」※

ＳＥ１３　主人公の股間の水音
【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】
【０―１秒ほど流した後、次の『ミネルヴァ』のセリフと重ねて流す】
【▲１　で、一度少し大きな音が出る】
【▲２　で、音量が一段階大きくなる】
【▲３　で、速度と音量が一段階大きくなる】
【▲４　で、速度がさらに一段階大きくなる】
【▲５　で、フェードアウトする】

〈主人公〉
「はぁ。はぁ。ぁぁ。
ぁぁ。ぁぁ。あっ❤」

静謐な森の中のようだったこの部屋に、卑猥な水音が響き渡る。
それを出しているのは主人公で、それがもたらす快感に喘いでいるのも主人公だ。
だが、背中から、耳元から、主人公以上の熱を感じる。
早い鼓動や、興奮した吐息を感じる。
それがミネルヴァもこの行為に夢中になっている証拠に思えて、主人公はまた、泣きたいほどホッとしていた。

●左　０センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【※ここからセリフ終わりまで、少々苦しそうに、快感をこらえるように話す※
※特にひそひそと、セクシーに※
煽りたい気持ちは少しなりを潜め、自然とこの口調になっていく。
なぜなら、静かに話した方が、主人公の性器の音がよく聞こえるので。
『自分の愛液の音を聞いて』という意味で言っている】
ほら……聞いて。
まだ入り口を開いて、クリトリスさんを探しているだけなのに。
それだけでちゅこちゅこ音がしているわ。
ぬちょぬちょで、ぐちゅぐちゅ。
きっと触ったら、とても熱いのでしょうね」※

▲1　ここでＳＥ１３の音のうち一回分（『くちゅっ』と一回分程度）が、大きな音になる

●左　０センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【※ここからセリフ終わりまで、少々苦しそうに、快感をこらえるように話す※
※特にひそひそと、セクシーに※

煽りたい気持ちは少し鳴りを潜め、自然とこの口調になっていく。
なぜなら、静かに話した方が、主人公の性器の音がよく聞こえるので。
主人公のクリトリスを触りながら話している】
……あぁ、やっぱり……思った通りだった」※

〈主人公〉
「ぁ。ぁ。あっ❤」

ここでミネルヴァが、ついに『それ』を見つけた。
すでにじっとりとぬめり気を帯び、ミネルヴァが触れるのを待ちわびているそれを。ミネルヴァの右手がとらえ、中指の腹で、優しく擦り始める。
主人公はもうそれだけで、全部手放して絶頂したくなった。
だが、快感に焦がれすぎていたこの身体は、簡単にそうはしてほしくないようだ。
とうとう与えられたこの喜びを、今度はどうにかして少しでも長い間、享受しようとする。

▲2　ここでSE13の音量が、一段階大きくなる

ミネルヴァ、『左０センチ』の距離のまま話す。

●左　０センチ

「【※ここからセリフ終わりまで、少々苦しそうに、快感をこらえるように話す※
※息遣いのみ※　で表現する。
漏れるような、気持ちよさそうな呼吸。
主人公のクリトリスを見つけて、いよいよ愛撫し始めたので】
んっふ……。
【※低く濁音喘ぎ※　する。
びくっと小さく、漏れるように喘ぐ。
予想以上に気持ちがいいので】
〃あ。
〃あ。
【※２回※　呼吸する。
深めの、耐えるような呼吸】
はぁ。
はぁぁっ……❤
【少し間をあけてから。

少し驚いた様子で。
まさか、ここまで気持ちいいとは思わなかったので】
……いつも、こんなに気持ちいいの？」

……いいえ、違う。
それは違うわ。
……あなたが、触っているから。
わたしの身体を理解してくれるあなたが触ってくれるから。
わたしは今、こんなに気持ちいいの……。

そう言いたかったが、言葉にはならなかった。
主人公はただ涙を流しながらはぁはぁとゆっくりと呼吸し、指が一往復されるごとに訪れる強い快感に、どうにか耐えるのが精いっぱいだったからだ。

もっと気持ちよくなりたい。
でも、ずっとこの気持ちいいのをされ続けたい。
ずっとイかずに、延々愛撫され続けたい。
このままずっと、ミネルヴァに抱かれていたい。

そんな思いに支配されながら、主人公は快楽の波に揺さぶられていく。

●左　0センチ

「【※ここからセリフ終わりまで、少々苦しそうに、快感をこらえるように話す※
※1回※　呼吸する。
深めの、耐えるような呼吸】
はぁぁっ……❤
【ふと主人公の乳首を見て。
快感にとらわれそうな自分の気を主人公の乳首に向ける事で、何とか取り戻そうとしている】
……あぁ。
乳首さんが摘（つま）んで欲しそうに切なくしてる。
【『なるほど』と理解した感じで。
優しくも、確信をもって言う。
主人公がそのようにしていつもオナニーしていると理解したので】
いつも乳首さんをこねながら、クリトリスさんいじりをしているのかしら。
【小さく、耐えるように喘ぐ。

とても気持ちいいが、まだ耐えられる程度なので】
んっ……❤
【※3回※　呼吸する。
ゆっくりとした甘い呼吸】
はぁ、はぁ。はぁ。
【ひとりごとのように。
うっとりと、少しもうろうとした感じで。
あまりにも気持ちがいいので。
『引っ張られる』とは、快楽に負けて、主人公を気持ちよくする使命を忘れる、という意味】
気持ちよすぎて、引っ張られてしまいそう……。
【※1回※　耳にキスする。
優しくいたわるようなキス】
ちゅ❤
【少し苦しそうだが優しく。
主人公にぜひとも気持ちよくなってほしいし、これだけの快感の深さなら、実際にそれができそうなので、頑張りたいと思っている】
……頑張るわね。

貴方に嬉しくなってほしいもの。
【ゆっくりめに、6回とも同じペースで。
最後の方は少し甘ったるくなる。
主人公の乳首を、左手だけで刺激しながら話す】
ぐに、ぐに。
ぐに、ぐに。
ぐに、ぐに……❤
【小さく、漏れるように喘ぐ。
とても気持ちいいが、まだ耐えられる程度なので】
……ぁ。
んぅ……❤
【※3回※　呼吸する。
ゆっくりとした甘い呼吸】
はぁ、はぁ。ふぅぅ……❤
【少し苦しそうだが優しく。
自分の意識を『主人公を、言葉でも性的に気持ちよくする』方へもっていく事で、快感に耐えようとしている】
ほら……鏡を見て」

びくびくと喘ぎ続ける主人公に、ミネルヴァがまた鏡を見るように促す。
そこには大きく足を広げ、だらしなく弛緩と緊張を繰り返す主人公がいた。
一番気持ちいい芯の部分を、しっかりミネルヴァの指にとらえられながら。
一回指の奉仕を受けるごとに、痺れるような快感に満たされて。涙ながらによろこんでいる自分がいた。
鏡は磨かれすぎていて、自分の性器がどんな色をしているかまで、はっきり映し出されてしまっている。
正直な所、恥ずかしくて、目を閉じてしまいたい。
でも、ミネルヴァが見てと言うから……主人公は熱くなった瞳で、ぼんやりと己の痴態を眺めた。

●左　0センチ
「【※ここからセリフ終わりまで、少々苦しそうに、快感をこらえるように話す※
少し苦しそうだが優しく。
自分の意識を『主人公を、言葉でも性的に気持ちよくする』方へもっていく事で、快感に耐えようとしている。
『お豆さん』とはクリトリスの事】

貴方の可愛いお豆さんの皮が、綺麗に剥けているわ。
あんな風に顔を出して、擦ってもらうのをずっと待っていたのね」

〈主人公〉
「っ……❤」

あぁ、そんな事を言わないでほしい。
その通りで、何も言えなくなってしまうから。

主人公は小さくいやいやと首を振ると、自分の本心をそのまま象徴するかのような突起から目をそらす。
そうだ。自分はずっと、ここを誰かにいじってほしかった。
それができないから自分でそうしようとして、それさえも難しいからずっと苦しかった。
そうだ。自分はずっとセックスがしたかった。
そんなものはくだらないと一蹴する堅物のふりをして、本当はずっと、心を許した相手に抱かれたかったのだ。

●左　0センチ

「【少し不思議そうに。
『明らかに、はっきりと見えるはずなのだけれど……』という感じで。
主人公が『見えない』と言っている。あるいは、いやいやするように首を振るので。
だが、半分しか信じていない。『本当は見えていらっしゃるのに『見えない、見たくない』
と首を振っているだけなのではないかしら』と気づいてもいるので】
……あら、見えにくい？
鏡の角度を少し変えてみましょうか。
これならよく見えるでしょう？
頑張ってる貴方の可愛いここを、しっかり見てあげてね。
【※ここからセリフ終わりまで、少々苦しそうに、快感をこらえるように話す※
低く、耐えるように喘ぐ。
とても気持ちよく、意識しないと耐えるのが難しくなってきたので】
っく。
【※6回※　呼吸する。
少し早く荒い、気持ちよさそうな呼吸。
余裕がなくなってきている】
はぁ、はぁ、はぁ。
ふう、ふう。ふうっ……❤

【低く、耐えるように喘ぐ。
とても気持ちよく、意識しないと耐えるのが難しくなってきたので】
んっ」

▲3　ここでSE13の速度と音量が、一段階早く、大きくなる。

●左　0センチ
「【少し苦しそうだが優しく。
進むにつれて、より苦しそうになっていく。
再び自分の意識を『主人公を、言葉でも性的に気持ちよくする』方へもっていく事で、
快感に耐えようとしている。
主人公の特に感じる所を指して話している】
あぁ……これね。
これ。
これが、貴方の好きな所なのね。
いつも一人でする時は、ここを沢山しこしこして絶頂していたの？
すごく。っ。触り慣れてて。
一際。敏感になってる感じが、するものね。

今まで沢山一人でした証拠ね……可愛いわ……❤

【※6回※　呼吸する。
少し早く荒い、気持ちよさそうな呼吸。
余裕がなくなってきている】

はぁ、はぁ、はぁ。
はぁ、はぁ、はぁっ……。

【※低く濁音喘ぎ※　する。
びくっと小さく、漏れるように喘ぐ】

〃あ。

【※3回※　呼吸する。
早く荒い、余裕のない呼吸】

はぁ、はぁ、はぁ……❤

【※低く濁音喘ぎ※　する。
びくっと小さく、漏れるように喘ぐ】

〃あ〃あっ。

【※3回※　呼吸する。
ゆっくりしているが荒い、余裕のない呼吸。
ものすごく気持ちがいいので】

ふーっ……❤　ふーっ……❤　ふーっ……❤

【※1回※　耳にキスする。
優しくいたわるようなキス】

ちゅ❤

【少し苦しそうだが優しく。
少しかすれた声で。
快感に耐えるのは大変だが、それだけ主人公が感じてくれているという事が、とても嬉しいので】

クリトリスさん気持ちいいのね。私も気持ちいい……❤
あぁ……お乳首も、ずっとこねてあげますからね。

【※6回※　呼吸する。
少し早い、少しもうろうとしてきているような呼吸】

ふう、ふう。ふう。
はーっ。はーっ。はーっ……❤」

〈主人公〉

「あっ❤　……ぁ❤　あ❤　あーっ……❤　あ❤」

だが、そろそろ『ずっと』はしてもらえない状況が近づいてきたようだ。
ミネルヴァの献身によって、主人公の身体は破裂しそうなほど快楽で膨らんだ。
小さな死が訪れるのはもはや時間の問題で、ミネルヴァもまた、それを待っているように見える。
主人公だけがそれに抵抗し、この幸せを、少しでも引き延ばそうとしているのだ。

●左　0センチ
「【少し苦しそうだが優しく。
うっとりと嬉しそうに。
主人公がイきそうになってきているのに気づいて。
快感に耐えるのは大変だが、それだけ主人公が感じてくれているという事が、とても嬉しいので】
可愛い子……お豆さんも、乳首さんも、こんなに赤くして……❤
一緒にイきましょうね。
しっかり支えていてあげるから、いつでも、好きな時にイっていいのよ。
【※6回※　喘ぎ交じりの呼吸をする。
だんだん喘ぎ交じりになっていく。
とても気持ちがいいので】

はぁ、はぁ、ふぅ。
はぁ。ぁぁ。ぁぁ。
【※濁音喘ぎ※　する。
びくっと小さく、漏れるように喘ぐ】
〝あ❤
〝あ❤
〝あ❤
【※息遣いのみ※　で表現する。
うっとりと、苦しげな息を漏らす】
……はぁ。
【うっとりとひとりごとのように。
まさか、ここまで気持ちいいとは思っていなかったので】
こんなに気持ちいいなんて……❤　すごいわ……❤」

〈主人公〉
「ぁ❤　ぁ❤　ぁ❤」

だけど、こんなに優しくされたら、もうもちそうもなかった。

耳のすぐそばで、こうも感じている声を聞かされたら、勝てそうもない。
主人公は、自分の秘部を触っているミネルヴァの右腕を、上からぎゅっと握りしめる。
そのまま、すがるようにして一緒に。
見た事もないほど深いところへ落ちていく。

▲4　ここでSE13の速度が、さらに一段階早くなる

●左　0センチ
「【※もうすぐ、主人公が絶頂する※
高く、耐えるように喘ぐ。
主人公の絶頂が近づき、自分が受ける快感もすさまじいので】
くぅっ……❤
【※濁音喘ぎ※　する。
びくっと小さく、漏れるように喘ぐ。
同じペースで喘ぐ。
だんだん声が低めから、高く。
最終的に中間程度の声の高さになる】
〝あっ。

〝あっ。
〝あっ❤
〝あっ❤
〝あっ❤
〝あ〝あっ……❤

【※6回※　呼吸する。
早く荒い、とても気持ちよさそうな呼吸】
興奮と喜びでいっぱいの呼吸】
はーふぅ、はーふぅ。はーふぅっ……。
【ほんの少しだけ早口になる。
あまり悠長に話していると、主人公がイくタイミングを逃してしまうのではないかと感じる程、今受けている快感はすさまじいので】
いいわよ……イきましょう。
一緒にイきましょう。ね？
【※6回※　喘ぎ交じりの呼吸をする。
だんだん喘ぎ交じりになっていく。
とても気持ちがいいので】
はぁ、はぁ、はぁ。

はぁ、ぁぁ。ぁぁ❤

【※濁音喘ぎ※　する。
びくっと小さく、漏れるように喘ぐ。
だんだん喘ぐペースが早くなる。
だんだん声が低めから、中間程度の高さになる】

〃あ。
〃あ。
〃あっ〃あっ。
〃あっ。
〃あ。

【※ここで主人公と一緒に、ミネルヴァも絶頂する※
※濁音喘ぎ※　する。
さほど派手ではないが『イった』という事が明確にわかるような喘ぎ】

〃あ〃あ〃あ〃あっ……❤」

▲5　ここでSE13がフェードアウトする

こうして、主人公とミネルヴァは絶頂した。

『感覚を合わせる』なんて、どんな技巧なのかもわからない術によって。
一緒に同じだけ気持ちよくなって、しっかりと身体を重ねながら絶頂した。
それとともに主人公はぐったりと崩れ落ちるが、その間もミネルヴァは、先の言葉の通り支え続けていてくれる。
それはまるで、大切な恋人にするかのように優しくて。主人公は、もっとその錯覚に酔いたくなった。

●左　0センチ
「【※9回※　呼吸する。
早く荒い呼吸から、だんだん整った、深い呼吸になる。
興奮と喜びでいっぱいの呼吸】
はー、はー、はー。
はーっ、はーっ、はーっ。
はーっ、はーっ、はーっ……❤」

ミネルヴァ、主人公の顎を持ちあげて、自分の方へ向かせる。
それとともに『左0センチ』から『正面0センチ』へ移動する。

●正面　０センチ
「【※６回※　キスする。
濃厚で、ねっとりしたキス。
まだ主人公に愛情を伝えきれていないと言わんばかりのキス】
ちゅ。
ちゅ。ちゅっ❤
じゅるるるっ。じゅっ❤　ちゅっ❤」

ミネルヴァ、キスを終えて『正面０センチ』から『左０センチ』に戻る。

●左　０センチ
「【※９回※　呼吸する。
早く洗い呼吸から、だんだん整った、深い呼吸になる。
興奮と喜びでいっぱいの呼吸】
はぁ、はぁ、はぁ。
はあ、はぁ、ふーっ……❤
ふう。ふう。ふーっ……❤
【優しくいとおしげに。

『合っている』事により、主人公がとても感じていた事も、自分もまたその快楽を受けて気持ちよかった事も、はっきり理解しているので】
……お疲れ様。よく頑張ったわね。
とっても気持ちよかったわね……❤
【※1回※　キスする。
優しくいたわるようなキス】
ちゅ❤」

ミネルヴァが、今日何度も繰り返してくれた、いたわるようなキスをする。
主人公は快楽の余韻に全身をぐちゃぐちゃにされながら、それを、素直に受け入れる。

ミネルヴァ、『左0センチ』の距離のまま『無声音ささやき』をする。

●左　0センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【※余裕がないながらに、ひそひそとセクシーに※
主人公を愛おしく思い『患者』や『助手』以上に思い始めている気持ちと、ここまで自分を気持ちよくさせた自分に、ささやかな仕返しがしたいという気持ちで言っている】
可愛いおまんこさん。

貴方のおまんこさん、甘えん坊さんで、とても可愛かったわ……」※

〈主人公〉
「……っ❤」

だけど最後にはこうして、また意地悪を言われて。
いやこれは意地悪ではなくて、彼女の中では思ったままを言った結果なのだろうとか。
それとも、やはりわざと恥ずかしい事を言っているのではないか、と、主人公はかぁっと身体を熱くさせながら頭を巡らせて。
せめて何か言ってやろうとするが……途端に深く甘い疲労が押し寄せ、言い返す事もできなくなる。

●正面　0センチ
「【※1回※　キスする。
優しくいたわるようなキス】
ちゅ❤」

〈主人公〉

「……ぁっ❤　ミネルヴァさっ……❤」

こうして主人公は、ミネルヴァに抱きしめられたまま、初めての経験を終えて。

――待って、まだ。
……まだ、だめ。
まだわたし、あなたに何も……。

そう思いながら、すでに、まともに動かせなくなっている己の身体を呪った。
まだ彼女と話したい事、伝えたい事が山ほどあるのに。
それらは、絶頂した後特有の充足感と睡魔に勝てず、視界はもう霞んで暗くなっていく。

ミネルヴァ、『左０センチ』の距離のまま『無声音ささやき』をする。

●左　０センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【とても優しく。いたわるように。
ミネルヴァは今、主人公の絶頂の余韻と疲労感を感じている。
これを受けて『少しでも早く休ませてあげよう』と思っているので】

ええ……少し休みましょう。
久しぶりの絶頂で、疲れたものね。
私も一緒に寝てあげる」※

その言葉とともに、主人公はまた新しい深い場所へ降りていく。
だけど、一人ではないらしいから。
ミネルヴァも一緒にいてくれるらしいから……安心して、目を閉じた。

●左　0センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【とても優しく、いたわるように】
お休みなさい……可愛い子」※

ここでフェードアウトして終了。